

## 〔論 説〕

# 農民家族のライフコース

岩上真珠

### 一 家族変動分析とライフコースの視点

日本の社会・文化構造を規定する重要な要素の一つとして、制度体としての「家」は早くから着目され、社会科学のそれぞれの専門領域において研究が進められてきたことは周知のとおりである。しかしそこでの研究の主流は、規範的、理念的な面に注目した制度研究であり、主たる関心は、「家」制度体内部の構造分析と、「家」相互の連関構造の分析に向かっていたようだ。近年になって、戦前から着手され、かつ豊富な成果を生み出した制度研究をふまえて、「家」についての新たな研究視点のいくつかが提示されるようになった。歴史的実体としての「家」を集団論的に考察することによって、「家」と呼ばれてきた家族の動態的把握の試み、さらには家族過程の分析もその一つであるといえよう。本稿は、歴史的実体としての「家」を、成員の相互作用過程としてとらえる立場から、

家族史に対する新たな取り組みの一視点を提示することを意図している。

ところで、「家」の構造は、個々の家成員の家族的地位に応じた行動を通して実現されるものと考えられる。それでは、連續性を志向する「家」の構造は、どのような内部過程を通して、どのように実現されているのであろうか。さらにまた、家族の連續性を前提とする直系家族制度の変容は、成員間の相互作用過程とどのように関連しているのであろうか。これらの点を、ここでは、各代相続人たちの家族経歴上の移行の態様を通して考察してみることにする。

### 二 相続人のライフコース

#### ——家族経歴の移行を中心として——

対象となつたのは、山梨県内の旧檍原村大垣外の五四戸の当代と先代の二世代の相続人である<sup>(1)</sup>。各家の相続人延べ一〇一人について、家族経歴上の主要な出来事を、いつ、

どのような順序で、どのくらいの間隔で経験したかを調査した。調査には、直接面接法、回想法が用いられた。先代死亡の場合には、先代の配偶者または当代相続人からの間接回答によって補った。対象となつた一〇二人の相続人の出生年は、一八六〇年代から一九五〇年代生れのほぼ一〇〇年にまたがつてゐる。今回は出生年によつて、一九一〇年代以前（明治後半～大正前半）に生まれた相続人（五十九人）と、一九二〇年代以降（大正後半～昭和）に生まれた相続人（四三人）の二つのコーホート（出生集団）に分け、それぞれのコーホートについて出来事経験年齢の平均値を算定した（表1）。なお、先代四八人は、二人を除いて、その他のコーホートについても同様に算定した。

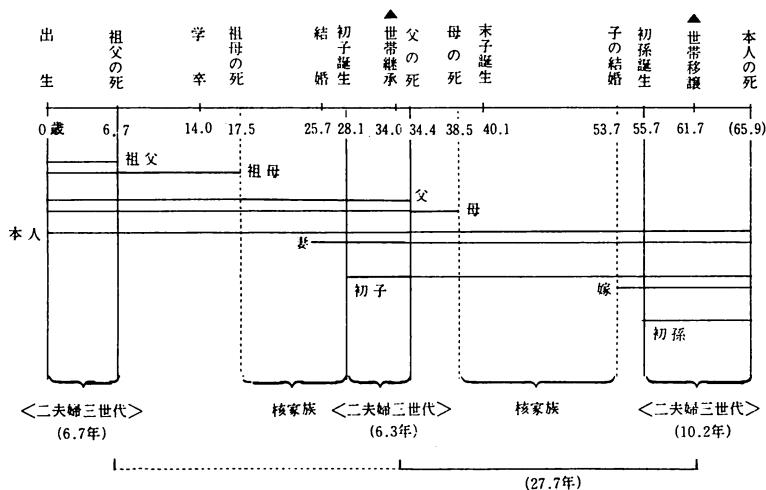
[表1]相続人の家族経験移行

出来事	1910年代 以前生まれ	1920年代 以後生まれ
出 生	0 歳	0 歳
祖 父 の 死	6.7	3.8
(学校卒業)	14.0	15.9
祖 母 の 死	17.5	13.5
結 婚	25.7	26.6
初 子 誕 生	28.1	27.9
世 帯 繙 承	34.0	28.5
父 の 死	34.4	28.0
母 の 死	38.5	38.0
末 子 誕 生	40.1	33.2
子 の 結 婚	53.7	54.2
初 孫 誕 生	55.7	55.5
世 帯 移 讓	61.7	—
本 人 の 死 (注1)	(65.9)	—

(注1) 経験率は67%

て前半のコーホートに含まれ、当代五四是、一九〇〇年代と一九一〇年代生まれの一三人を除いて後半のコーホートに含まれている。表1は、家族経験の順序と、各出来事の経験年齢を示したものである。順序は、前半のコーホートのものに従つており、後半のコーホートではいくつかの順序が逆転をしていることに注意されたい。ただ後半のコーホートの場合には、家族経験のあとの方の出来事をまだ経験していない者がかなりおり、参考資料の域を出ない。

そこで、一九一〇年代以前のコーホートの平均的な家族経験の移行をみると、まず、学卒以前に祖父の死に出会う（六・七歳）。二五・七歳で結婚して、二八・一歳で初子を得る。三四歳で世帯を継承し、ほぼ同じ時期に父の死をむかえる。大陸外は伝統的に長男相続であり、継承形態は「死譲り」が五九事例中二一、生前移譲が一四、継承前に父が亡くなつた事例が一二、残りは非該当（分家・来住初代）および不明である。三八・五歳で母の死を、四〇・一歳で末子（平均出生児数五・四人）の誕生を経験する。したがつて父母ともにその孫の顔は見られるものの、あとから生まれた孫は見ないで死ぬことが多いことがわかる。つまり、あとの方の子どもたちの祖父母との相互作用のチャンスがないのである。五三・七歳で子どもの結婚を経験し、



[図1] 家族の連続性の一モデル

[表2] 家族経歴における危機的位相

危機的位相	経験率%
出生前に祖父死亡	3.6.5
" 祖母死亡	1.5.8
卒業前に父死亡	1.8.4
" 母死亡	9.2
結婚前に父死亡	3.5.4
" 母死亡	1.7.9
初子誕生前に父死亡	3.9.8
" 母死亡	2.3.1
末子誕生前に父死亡	5.9.8
" 母死亡	4.3.0
初孫誕生前に 本人死亡	1.8.8

注 経験率は、N = 102 から  
不明・非該当を除いた母数  
に対するもの。

五五・七歳で初孫を見る。つまり祖父役割を取得する。六一・七歳で世帯を次代に譲り、六六歳前後で自らの死を迎えるという一生の過程が描かれる。これは、大垣外の明治後半から大正前半生まれの相続人たちのほぼモーダルな家族経歴の移行パターンだとみなされよう。

この移行パターンを一つのモデルとして、世代間の相互作用のチャンスと期間を示したのが図1である。図1に示されるように、これらの出来事がこのような順序で、このような時機に経験をされるならば、家族の連続性は保証される。しかし、直系家族制が安定的に維持されているとみなされるこのモデルにおいても、直系家庭の理念型ではある二夫婦三世代の形態は、かなり限定された期間においてのみ実現

〔表3〕 家族経歴上の出来事の経験間隔

	祖父の死から父の死まで	祖母の死から父の死まで	父の死から母の死まで	卒業から父の死まで	卒業から母の死まで	結婚から父の死まで	結婚から母の死まで	初子誕生から父の死まで	初子誕生から母の死まで
家族経営問題	26.1	21.1	2.9	25.3	33.2	16.0	22.9	14.8	21.6
家族経営危機	6.3	- 3.6	23.5	- 6.6	17.7	- 17.7	6.6	- 19.7	5.3
	夫子誕生から父の死まで	夫子誕生から母の死まで	初子誕生から父の死まで	初子誕生から母の死まで	既婚から父の死まで	既婚から母の死まで	結婚から離婚まで	既婚から子の初婚まで	既婚から子の持続まで
家族経営問題	1.2	9.8	- 12.5	- 6.8	2.3	7.6	13.9	10.7	21.2
家族経営危機	- 28.2	- 4.3	- 26.0	- 16.8	- 14.9	8.9	- 3.6	29.7	40.0

注】 単位は年

注2 家族歴上の危機とは、父が本人学卒以前または学卒後5年以内に死亡の場合をいう。

されうるものであることがわかる。もし、ある家族経歴上の経験が、平均よりもかなり早く、あるいは遅くなされたり、経験する出来事の順序が変われば、モデル通りには展開できない。ある成員の家族経歴移行の時機と順序が変化することによって、世代内・世代間の関係のあり様が異なるからである。しかもそうした事態は、実際に少なからず生じている。表2に示すように相続人のうち三六・五名は出生前にすでに祖父が死亡しており、また約四割が、初子の誕生以前に父の死亡を経験している。これらの事例においては、理念的には二夫婦三世代の形態が出現する時期にそれが実現できず、家族の連続性は変則的な形でしか維持できないか、あるいは維持するのがきわめて困難な事態

に直面することになる。

表3は、家族経歴の移行が、二世代にわたってほぼモードに沿って経験された事例と、学卒以前または学卒後五年以内の早い時期に父の死を経験した事例について、出来事間の平均間隔を比較したものである。マイナスの符号がついている場合には、出来事の経験順が逆転していることを示す。家族経歴の移行が順調なパターンを示すグループでは、卒業から父の死まで二五・三年、結婚から父の死まで一六年、初子誕生から父の死まで一四・八年、末子誕生から父の死まで一・二年、継承から父の死まで二・三年と、いずれも一定の間隔を有しており、家族成員間の相互作用のチャンスが大きいことと、世代が重複しながら家族の連続性が安定的に維持されていることを示している。また同時に、祖父母が初子（祖父母にとってはひ孫）まではみることができる、いかに安定的な世代間の連続性がみられる場合であれ、四世代を実現することはできなかつたことも、この表からうかがえる。

一方、家族経歴において父の死を早く経験した場合には、家族の連続性にとって、いくつつかの危機的位相が発生する。まず第一に、間隔の平均値にマイナスがついているものが多いためからもわかるように、家族経歴の移行順序がいくつかの出来事のあいだで異なる。とりわけ、結婚および初

子誕生以前に父の死を経験することにより、二夫婦三世代の理想的形態は、父の死の時点から本人の初孫誕生まで約五〇年間も実現されないことになる（図1参照）。しかも、もし早い時期での父の死が、後続する家族経歴に影響を与える、本人の結婚、初子誕生、子の結婚、初孫誕生の経験年齢を遅らせるように作用する場合には、その実現は、さらにも引き延ばされることになる。さらにまた、こうした相続人が、万一一初孫誕生以前に死を迎えるような場合には、さらにもう三〇年近くもその実現は不可能になり、実際に四分の三世紀以上にわたって理念的形態が実現されない場合も生じうるし、こうした事態は実際にかなりの確率で生じてもいる。そのような場合に、家族の連続性を担うるのは祖母あるいは母である。表3に示すように、早い時期に父の死を経験したグループでは、祖母の死を父の死の三・六年後に、また母の死を初子誕生の五・三年後に経験しており、「家」の連続性が系譜以外の者によって実質的に担われえたものであることを示唆している。

以上、家族経歴の移行の態様を垣間みるだけでも、直系家族を制度として維持することがいかに至難のことであつたかがわかる。言い換えれば、家族変動への動因は、家族の内部過程それ自体の中に、つねに内在していたということができる。またこのことを裏返せば、かかる困難なシス

テムを維持していくためには、同族、親類、親分—子分関係、組など、家族外資源の動員が必要不可欠であったにちがいない。「家」を取りまくそれらの諸システムを、「家」の内部過程の宿命的な脆弱さを前提にして問題にする視点も、必要であろうと思われる。

ところで、「家」と「家」の連関構造の変容についても、「家」成員のライフコースの視点からアプローチすることができる。大垣外は、故喜多野清一博士の業績によつて、親分—子分関係が村落構造の統合において顕著に機能している村落として知られているが<sup>(3)</sup>、こうした親分—子分関係もまた「家」の内部過程と運動していることを示唆する一つの事例を紹介しておきたい。

この村は、オーカタと呼ばれる、村落社会の階級構造の頂点に位置するオヤブン家があることは知られているが、このオーカタ家の先代は、若い頃に親（先々代）の反対を押し切つて東京に出た。明治三八年のことである。以後、結婚も東京で「勝手に」して、病を得て昭和一九年に帰村するまで一度も村に帰っていない。当代は東京生れの東京育ちで、復員してみると昭和二〇年に大空襲を受けて家がなくなつてしまい、そのため二五歳で初めて大垣外で暮らすようになるまで、村とはほとんど没交渉だった人である。大正五年に先々代が亡くなつて以後、相続人不在のオーカ

タ家を実質的に取りしきり、オヤブン役をこなしていたのは先代の弟であった。先代は昭和一九年に帰村して二年後に亡くなり、結局、自身はオヤブン役を生涯一度も引き受けなかった。昭和二〇年に帰村した当代は、父の死にともない翌二一年にオーカタ家を継承するのだが、実質的には父の弟が、昭和二八年に七四歳で死ぬまで（彼は名目的には自身を通した）、引き続きオヤブン役を引き受けた。長期にわたる相続人の不在と東京育ちの当代といったオヤブン家の内部過程は、村内におけるオーカタへのオヤブン取りに一定のインパクトを与えたものと思われる。

大変に興味あるこのテーマについては、紙幅の都合と、なお一層の考察の必要のために、今回は問題提起にとどめておきたい。付言するならば、大垣外のオーカタの場合には、家族内資源（相続人の弟）によってオヤブン役が引き受けられ続けたが、同じ山梨県のある村では、大きなオヤブン家が相場に失敗して当主が離村し、それまでこの家をオヤブンに立てていた数多くのコブン家が、「仕方なく」オヤブンを他家に代えた事例も報告されている<sup>(4)</sup>。

もちろん、親分・子分関係をはじめとする「家」を取りまく諸関係の変容については、村落社会内外の他の多くの変数を考慮する必要があることは言うまでもないが、これまで述べてきたような相続人のライフコースや、家族の内

部過程といった視点を導入することによっても、有効な示唆を得られるだろうことを主張したい。

### 三 結びにかえて

ある制度がなぜ存続しているのか、あるいはなぜ変容したのかについての有力な洞察を得るために、制度として理念化されている行動のパターンが、どのように維持されているかを把握し、分析する必要がある。ライフコースの視点は、そのための一方法を提供するものと考える。とりわけ、家族変動についての洞察を得ようとすれば、家族員の相互作用過程を含めた内的動態を明らかにすることは、重要かつ必須の手続きであると考える。今回は、個人のライフコースのなかの、家族経歴の移行パターンだけを、しかも一面的に取り上げるにとどまったが、家族経歴以外の、教育、職業、地域移動といった他の諸経歴と家族経歴との相互依存関係や、家族員相互の家族経歴の連関性といった点にも眼を向ける必要があろう。ここで示し得たことはきわめてわずかであるが、相続人の家族経歴の移行の態様を通して、「家」の内部過程、とりわけ世代間の連続性についての一つの局面は、示唆したと考える。またその背後に垣間みえたのは、直系家族を制度として維持することの至難さの事実である。

こうした行動レベルのデータを、通時的、縦断的に収集することによって、日本の「家」の存続と変動のメカニズムの解明に、新たな光が当たられることが期待される。ただ、行動レベルのデータの収集には多くの制約があることも事実である。今後は、新たな視点をこれまでの研究成果とどのように接合しうるかとことと、適切なデータ・セッティングとデータ収集の方法を開発することに、注意が向けられる必要がある。

(1) 一九八四年現在戸数で五八戸。そのうち四戸は事

情があり調査不能。

(2) 対象となつた五四戸のうち、四戸は分家初代、来住初代のため先代なし。二戸は先代についての情報不詳。

(3) 喜多野清、「甲州山村における同族組織と親方子方慣行」、「民族学年報 II」一九四〇年。  
(4) 安藤由美、早稲田大学文学部社会学専攻卒業論文、一九八一年。

#### 参考文献

- 喜多野清、「ザルイとオヤブン・コブン——山梨県北都留郡上野原町大垣外——」、「『家』と親族組織」、早稲田大学出版部、一九七五年。  
正岡寛司、「近世末期農民の家族関係とライフコース」、

「宗旨改帳」の時系列分析をとおして——」、「家族・親族・村落」、早稲田大学出版部、一九八三年。  
森岡清美・青井和夫編著、「ライフコースと世代」、垣内出版、一九八五年。

(駒沢大学・社会学)